「介護福祉教育における生活歴に対するアプローチについて」

－効果的な教授方法の実現に向けて－

○　鴻池生活科学専門学校　　多田　千治（3064）

キーワード：生活歴、エンパワメント、利用者理解

１．研 究 目 的

2007 年 12 月、近年の介護・福祉ニーズの多様化・高度化をふまえ、人材の確保・資質の向上を図ることを目的に、「社会福祉士及び介護福祉士法」が改正され、あわせて、社会福祉士および介護福祉士の資格取得のための教育内容の見直しが行われ、2009 年４月から、新しい養成カリキュラムに基づく教育がスタートしている。新カリキュラムに基づく教育内容は、介護の専門技術について学ぶ「介護」に加え、教養や倫理を養う「人間と社会」や介護に必要な周辺知識を学ぶ「こころとからだのしくみ」の 3 領域で構成されている。その中では、他職種との連携やチームアプローチに関わる講義も行われ、介護福祉士の資質向上を目指す内容となっているのである。さらに、2012 年 4 月 1 日から、「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正によって、介護職員等によるたんの吸引等に係る研修事業も創設され、養成校の教育カリキュラムとして 50 時間の追加することという決定も行われ、介護福祉士としての役割も広がっていくことが、今後も予想されるのである。

私自身は、現在、介護福祉士養成施設の教員であるが、近年、受け持ち利用者の状況や介護計画の立案および実施の用紙を完成させることに集中し、利用者に関する過去・現在・未来の姿を正確に把握できていない学生も多く見られる。実際の実習においては、施設で閲覧するケースファイルなどに書かれた事項をすべて真実だと考え、それに関する疑問を持たない学生も多く見られ、書かれた事項以外に、どのようなことを聞くべきかという質問自体も思い浮かばないという言葉も見られた。生活歴の理解とは、過去・現在・未来の側面に関する情報収集が行えて初めて達成できるものであり、このような言葉の背景には、教える側にも、生活歴として伝えている内容を見直す必要性があると考えられる。

今回、生活歴に対するとらえ方を明らかにし、今後の効果的な教授法を探し出す手がかりにしたい。

２．研究の視点および方法

・生活歴に関する定義や区分を紹介し、その内容が、福祉の対象者理解に与える影響を示し、生活歴に対する理解とその教授方法への示唆を明らかにする。

３．倫理的配慮

・本研究については、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて行うものとする。

・本発表に関する資料については、引用に関する記述を正確に行い、原著者名・文献名・出版社・出版年を正確に明示し、原点主義を徹底するように努める。

４．研 究 結 果

今回の研究では、大北秀雄氏による生活歴の分類を示したが、同氏は、生活歴の理解の弱さがケアマネジメントの弱点であると提起している。生活歴自体については、好きなものと知っておくとよいものの２つに区分している。前者に含まれるものには、時代背景を問う物が多かったが、一日の好きな時間やテレビ番組や人間という項目は、個性的な答えが期待できる内容も含まれていた。後者に含まれるものには、現在一番楽しいことや悲しいこと、過去に一番良かったことや悪かったことなどに代表される現在や過去というものを問う内容が多かったが、言葉の大きさや速度という少し生活歴としては独自性があると思われる内容が含まれていたことも印象的であった。

次に、高津等は、著書の『集団社会学入門』の中で、生活歴とは、生活習慣の変化の歴史であるとし、過去に関してそれを知ることによって、未来にも同様の変化が起こるごとが予測できる。生活歴の調査といえば、一般的には、出生・学歴(教育など)・婚姻歴・ライフイベントに関するものが想定されるが、それは、生活歴の変化の契機を調べているのであって、生活歴そのものの変化ではなく、その後の生活習慣がどう変わったかを理解することが大切である。その上で、各人の生活にはそれぞれ個性があるので、それぞれの要点を聞いておくことが求められるとしている。社会学的な視点からすれば、生活歴は、定まったものではなく、変化を含む内容であり、変化をふまえた生活の個性を尊重することで、利用者の方が望むこと(本人の主訴)への接近につながるのであり、利用者の変化を引き出す関わりの実践が、援助者には求められるのである。

５．考 察

実際、学生の立場からすると、実習は、期間も限られており、その中で、介護計画の立案や実施を行う上では、時間的制約があることも否めない。そして、各施設における生活歴に関する情報の違いも存在し、どのような項目を生活歴として理解すればよいのかに関し、学生自身も明確に理解できていないと考えられる。よって、生活歴を学生が理解する上では、教える側も、生活歴に含まれる内容をどのように伝えるかが問われるのであり、今は、学校を含めた養成施設で教える内容と福祉現場における生活歴の理解に差があると考えられる。私は、今回、大北氏の分類や高津氏による考え方を通して、生活歴は、決まったものではなく、変化するものであるということを理解できた。生活歴を理解することは、利用者本人の辛さや弱さも知ることと同時に、その強みや可能性にも目を向けられる大切な機会である。そのことは、エンパワメントやストレングスとの関わりを示し、利用者との円滑なコミュニケーションや信頼関係を構築する原点とも言える。この原点を確立することによって、利用者理解を深められるのであり、介護計画の立案や実施のプロセスへの関心や興味を学生に持たせることができるのではないかと私は考える。

今後の介護福祉教育においては、生活歴の理解に関する個性のある項目を確立し、それを教授して行くことが急務であり、そのことは、介護における学問としての体系化の１つとしても必要な過程でもあると私は結論づける。